



## (1) 平成 27 年度 OK バジ帰国報告会完了

当法人が主催する今年度の OK バジ帰国報告会は、6 月 8 日の鴻巣に始まり、6 月 12 日に東京、24 日に横浜、7 月 2 日に大和、7 日に仙台、18 日に千葉で開催し、すべて無事終えることができました。

また、当法人が協力して、6 月 11 日には淑徳大学（千葉キャンパス）でコミュニティ政策学部の学生 150 名を対象とした講演授業、7 月 7 日には仙台「わかくさ幼稚園」と「市名坂小学校」共催による保護者 180 名を対象とした講演会が開催されました。

各報告会では、主に 4 月 25 日の震度 7.8 及び 5 月 12 日の震度 7.3 のネパール大地震発生による東パルパ地域の被災状況を自ら撮られた写真を使いながら報告されました。

OK バジは、4 月 25 日の地震発生時はタンセンに滞在中。ネパール在住 20 年間で初体験の横揺れが大きな、長い地震で、ネパールの建物の構造を考えて一応戸外に飛び出たものの、周囲に被害がなく、大したことはないとその時は思った。しかし、数時間後に若者がカトマンズ周辺で大被害が出ていることを Facebook の画像を見せながら教えてくれ、慌てて日本のご家族に無事であるとの連絡をいれたとのこと。そして、5 月 12 日の大きな余震の時は、日本の支援で完成した校舎の引渡し式の最中で、傍の崖崩れで発生した土煙が校庭にまで届き騒然となったことなど、話は自ら体験されたことから始まりました。



その後、タンセンの警察官からの情報で、東パルパの村で大被害を受けているのは、サハルコット郡のスケコット村(55 世帯 235 人在住)で、42 世帯の家屋が崩壊していることを知り、早速に状況を見るために訪問、村びとたちから避難テント、毛布、米の不足を訴えられ、その場で 10 万ルピー（12 万円相当）を救援した。その話を耳にした県知事から直接に電話があり、救援金は政府の口座に纏め、被災地・被災者に平等に分配することになっているので、今後直接に救援することは止めるようにとの指示を受けられた。

一方、他日地元の教育長に呼び出され、政府からの救援金がいつ、どれだけ届くか不明であり、OK バジの支援でできた学校の早期復興に是非とも協力してほしいとの要請を受けられた。

救援金の政府口座への一本化については、海外の NGO/NPO から批判的意見もあるが、通達は 6 ヶ月施行されるので、OK バジとしては、支援者からの大地震救援金及び支援金のネパール送金は当面様子を見ること、今年度の支援金は被災した学校の復興工事に重点的に充当したいとお考えが示されました。



報告の最後に、震災後ボランティアで復興支援活動を始めたネパールの若者たちがたくさんおり、その人たちが自分の始めた小さな活動がどんどん大きくなっていくことに感動した話を纏めた雑誌記事に、OK バジも感動し、その記事の標題「No help is small. (どんな支援も小さいことはない。)」と、記事の締めくくり引用されていたマザー・テレサの言葉「Don't wait for leaders. Do it alone. Persons to persons. (リーダーを待つな。自ら始めよ。そして人から人へ)」を紹介して、報告を閉められました。

会場からは地震のこと以外にもご質問がありました。少しご紹介すると、①「教育支援の成果として上手くいっているケースは」→「ドリマラ村に住み始めた時は、男子大学生1名（女子は小学5年生が最高）だったが、今は大学生31名（うち女子12名）となっている」②「着ている衣服はよくなっているのか」→「共有地でのアマリソ、コーヒー、シナモン等の換金商品の栽培とジープの共有化と道路整備による市場アクセスの容易化で、村の所得向上努力が少しずつ成果をあげ、衣服にも金が使えるようになってきた」、③「女性の活躍が目立ってきている背景は」→「高等教育（高校以上）を受けた女性が増え、帳簿管理等村の重要な仕事を担えるようになってきた」など、支援で変化してきている実態にご関心が多かったです。

淑徳大学での講演授業や仙台での講演会を聞いた方がたからも素晴らしい感想が寄せられています

- ・「垣見さんの支援10ヶ条は、ソーシャルワーカーに必要な倫理としても当てはまると思った。ワーカーが一人で頑張りすぎるとバーンアウトを起こしてしまうし、上手く支援出来なくなってしまう。・・・クライアントとともに歩むパートナーとなる必要がある。」（学生）
- ・「今回の講演で私が最も強く感じたことは、心の貧しさこそ真の貧困ではないかということである。・・・ネパールを貧困だと考えていた自分が恥ずかしく思えた。」（学生）
- ・「支援金のバラマキになっていなく、自立につながられる支援をされていることが垣見さんの凄いところだと思いました。」（学生）
- ・「『考え方ひとつで物事が変わる』という言葉が印象的でした。」（保護者）
- ・「本当の支援の仕方《自立が基本》を教えてくださいました。」（保護者）
- ・「『不足に感謝』という言葉がとても印象的でした。」（保護者）
- ・「日頃の生活が当り前に感じていた日々を、改めて感謝できたり、小さなことにありがたみを持って、心豊かに生きてゆきたく思いました。」（保護者）

## (2) 東日本大震災被災地支援

第8回定期総会（6月12日開催）でご承認いただいた本年度の事業計画にもとづき、「東日本大震災被災地支援事業」の支援先第1号は、任意団体「蓬莱町まうさぎ」（代表：黒沢祥子さん）とすることに決定し、支援金10万円を7月2日に送金いたしました。福島市に避難している福島県蓬莱町の子どもたち約20名を集めて9月に山形県朝日町で開催する一日保養キャンプの運営費用を支援するものです。

## (3) インド支援先「SEDS」への本年度支援額の決定

継続支援しているインド「SEDS」（Social Education and Development Society）との間で本年度の支援内容、額についての交渉が成立して、契約書を取り交わしました。これに基づき、支援金40万円を送金する手配を7月28日に実施いたしました。なお、同団体との連絡窓口はこれまで会員の高島氏にお願いしておりましたが、本年度より伏見理事が担当することとなりました。高島氏には、これまでのご協力に心から感謝申し上げます。

≪編集後記≫梅雨が明けたら猛暑に突入、その中でも最低毎日2~3件の予定を精力的にこなされ、ご帰宅も夜12時近くになることもままあるというOKバジ、あと1週間ばかりでネパールにご帰国されますが、学校は再開されたものの、まともな教室で勉強できない状況を1日も早く解消をというお気持ちに立ちはだかるのが、救援金の政府口座への一本化。救援金を直接に支援校に届ける合法的な方法が見つかることを切に願っています。（編集担当：KT）

炎天や 笑ひしこゑの すぐになし 橋本多佳子

認定 NPO 法人 いきいきフォーラム草の根支援

〒113-0023 東京都文京区向丘1-7-8 コミュニティスペースほのぼの内

TEL/FAX 03-3816-5346 E-Mail [f-kusanone@tcn-catv.ne.jp](mailto:f-kusanone@tcn-catv.ne.jp)

<http://www1.tcn-catv.ne.jp/ikiiki-kusanone>